

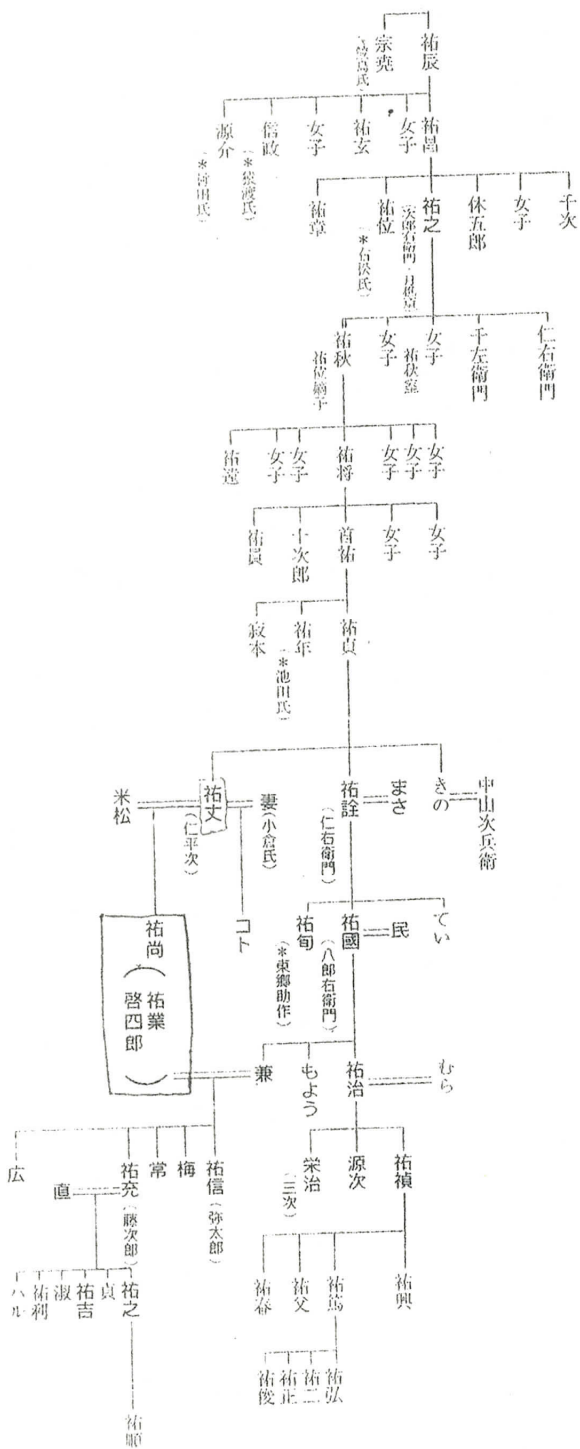
「木脇啓四郎 人と業績」

平成二十五年三月十日（日）

鹿児島大学

丹羽謙治

一 木脇家について



二 木脇啓四郎『萬留』（明治三十一年成）

《表紙》

○祐業一代記ト、中原尚助氏、竹田街道ニ於テ徳川將軍ノ兵ヲ碎キ大坂ニ追込タル連戦ヲ記シタル書面、其外萬留、或ハ八十年來知音其他の人物を記したるも有り。実ニ淀川雜舟なり。

①《生い立ち―茶坊主になるまで》

初祐尚、後營業を始し折、祐業と改（拙者ハ初金時仁平次藤淵。啓阿弥又啓四郎ト五度愛ル）。父上様（仁平次、祐長公、沖永良部島見聞役ニテ御詰ノ節、妾ヲ置レ、其腹ニ生レタリ。此母ハ御叔父仁右衛門様同島（御詰。ト云ヒシナリ。父上様御先見、将来ハ金ノ世界ニ可成ハ案中なりとて、拙者ヲ金時ト名付玉ヒシ由。生年ハ文化十四年即文政元年午也。月ハ四月十三日、該島ノ仮



木脇啓四郎肖像（左）

屋ニテ生レシ由。然ルニ明ノ二月五日、父上様御死去被遊タリ。御病症ハカクト云病ノ由ニ付、死ヲ御究メ被遊候ゆへ、細密ノ御遺言、御自筆ニテ御叔父（仁右衛門、異父ノ御舎弟中山次兵衛様（次左衛門美、其弟川上郷右衛門様、木脇八郎右衛門様、東郷助作様充也。母上様、御姉様ニハ、父上様御作置レ候家ニ是迄之通被召置、姉様ニハ（似寄の縁與いたし、跡ハ、拙者上る迄之間ハ、此節島方の潤益も可有之ニ付、養料ハ御扶持かしたし、是ニ而取續候様御認相成候次第。右ニ付、東郷助作殿を跡取集方ニ付罷下候様御申越候處、八郎右衛門殿、拙者行とて、下リニ相成、何もかも賣拂、父上様御残し被置候畑地貳反位、刀大小、并二鎗、是ハ島ニ而御打調、拵方も同断ニ而、外ニハ掛物一幅、正成の圖、立烏帽子鎧着用、後の大松の木ノ枝より菊水の旗さし出たる圖也。仮屋本より一里位西ノ方、玉城と云所え引移させ、御庭の前ハ三尺斗高く筑立、角屋敷ニて、木戸の入口ニ大きな桃木有。是ハ実かなり喰たる事不覺。○母君ニかるわれ、氏城といふ所の神様參詣いたし、返リニ曾木東太郎殿といふ流人の処ニ寄る。此人ハ父上様御旧知ニ而、父上様御事をよく存居候御方にて、母君と御嘶有之たる哉も覺ゆ。景氣のよき所にて、丸窓有之。庭の前ニハ小溝有之。左右ハ蘭生茂候處を、シヨケにてすくひ候へハ、小海老沢山取たり。又、成長シテ登ルまで、成長方の事ヲ仮屋本の登與村といふ仁を親分ニ御頼置相成、此人追々被参たり。是ハ随分富家ならん、庭など筑立、入口ニハ四本柱の蔵も有り。其下之和泊の海邊ハ前廣き石畳ニ而、所々ニ穴有之。其穴の内ヘシヨクといふ小魚沢山居たり。是を取て帰りに喰たるも覺。 （中略）

▲上リニハ仲仁と云者を頼ミ拙者ニ付られ（年比四十四五なり）たり。拙者、四ツ五ツの比より大和へ行とて相待居たるよし。是より上リの日ハ、皆々親類中見送として、船ニ乗りたるが、其内いねて不覺、船の出る時目か覺、仲仁と二りニなり淋しかりし事を覺ゆ。出船ハ六月の末也。其内運天と云琉球の湊え汐かりし、前的小島へ貝取ニ行たる事、并ニ同所え赤瓦ニ而ふきたる大きな役所有、爰ニ行て遊ぶ内ニ、官人、大キナ重ニ火菓子持来り、両手ニあまるほとくれラレたり。それより出船、又、永良部え船かりす。此時母君も来り、いたかれ候時、母君の涙か拙者の顔ニかりたり。今更思へハ、

親子の深情思ひやられ、涙ニむせひ候。且又、運天の左脇へ数々穴有。何かと尋ぬれハ、死人を置所なりといふ。おそろしかりし事を覚ゆ。是より大島の焼打といふ湊え汐かゝり、七島灘を無難ニ通ると、沖中より開聞山はるかにミゆれハ、始て登る人ハ馴子舞といふをするか例ニ而、仲仁正中を出し、

舞を仕たり。其日の夕くれ前、秋目の湊え汐かゝり、それより山川へ廻船す。爰ニ而又、向風ニ相成、滞舟となる。仲仁か云ニハ、

是より歩行ニ而行方かよしとて、にきりめしなと持、喜入郷の「中時分ニ而日かくれ候故、宿をかり候処、いろ／＼云て不受合、やう／＼して

かり出し内へ上り候処、足のいたミ、八才ニ而七里余有之、殊ニ舟上りの道故、打伏居候処、夕飯出る。粟の飯ニ、菜ニ里いも、皿ハ塩付の

小魚、その味のよひ事今もわすれず。一泊して明の朝、足のいたミ

にてアルカれす候故、丸木船を頼ミ、谷山の七ツか島の間を通り、

郡元の濱え着舟して、船頭えかろはれて唐渚の入口ニ而、木

脇殿を尋候処、幸父上様幼少之時より丁寧ニ御そた

て被下候吉之丞といふ者か、此者船頭より拙者をせおひ取、木脇氏え着候処、

九月の末ニ而寒き故、おもよさまのわた入、片から裾の、

其比の流行、赤ビントウじの衣裳をかりて、山川より荷物の来る迄かりて着たり。叔父様、おはさまなど、且又、御民さま

御丁寧なり。段々する内、三年ニ相成候故、上荒田の郷中へ」

出る。然ルニ、伊東吉兵衛との拙者より、其ばゞさま、かゝさま、至極かはり

かり、おそく成りたる時ハ泊り候様被申、それにすかり大かた

爰ニ泊る。然るニ、十四才ニなり、四月末、東郷助作様御世話

ニ而、表坊主被仰付、其年の末ニハ、正道ニ相勤候処、大目付

座詰、十六の時ハ御家老座詰、十七の時ハ御数寄屋御茶

道、十八の時ハ小頭寄被仰付、米も八石いたゞき、廿四の時

兼とのと縁與いたしたり。それより段々執行いたし候処、

松山隆阿弥老より花道の皆傳いたし、鹿児島中の花

頭被仰付たり。格別の物ニ而、御對面所の敷舞臺ニて、

御用人取次ニ而被仰付、それより花立花の指南いた

し、毛利為春殿、藺田安哲殿、萩原林悦とのなどへ傳受

いたしたり。……

② 《初めての京都行・江戸詰》（天保十四年、弘化三年）

……一ヶ月ニ式朱ツ、御賦りをいたゞき、相詰居候所……

（頭注）シカシ此式朱ツ、カヨホト拙者力為ニ財源ニナレリ。故ニ外出ニハ一六屋ニ行テ、

樂シミハ金ナシニテ出来ず、故ニ唐いもの少サク切テ付アゲニシタルト、スルメヲカミテ神社佛閣ハ大方、江戸四方十里内外ハ参詣せり。十三里鎌倉、十里小金より先十里ハカリ、モクサノ松連寺、西洗の太子、船橋の大神宮、国分臺、中山寺等■ス。是ハ大方四本休次郎殿、折田善庵殿などなり。

栗原信充（一七九四～一八七〇）

幕臣。故実家。幼名、陽太郎。字、伯任。通称、孫之丞。号、柳庵・柳閣・又樂

栗原信晃 信充の長男。太平、左兵衛。

栗原信允 信充の次男。寅次郎。※元治元年来鹿。

栗原（武田）信和 駒之丞 ※元治元年来鹿

③ 《甲冑製作》（天保、弘化）

江戸詰の節、御長屋ニ而作方いたし居候処、海老原宗之丞

殿といふ御勝手方御用人、村田源右衛門殿旧知入来、同道して参り

呉候様承り候而、折を得て差越候処、段々漸の序に

「つら／＼當時の景勢を伺ふニ不遠乱世ニなる勢ひ承候

故異國舟等の為、米蔵十二ヶ所ニ作り米を込、大炮

小銃製作所、并多しよふ製造所迄相立候得共、いまた

鎧の手當無之ニ付、當地ニ於て、諸細工人并ニ故実家も

伊勢貞丈の流も有之候故差越ニ而傳受いたすべく、

其入費ハ拙者方より差出す」との事故、鎧作の明珎始、税所

氏などへおり／＼差越下地より成就迄の手数賦方迄

傳受いたし候段海老原氏へ申遣し候処、直ニ帰國被仰付たり。

（中略）

……すへて賦方の手数出来候故、海老原氏え

申遣処上、滑川末川家門前え一反余の屋しき御取入

四十枚敷の製造所、且又、塗物、縫物の所ハ門の脇え十四帖

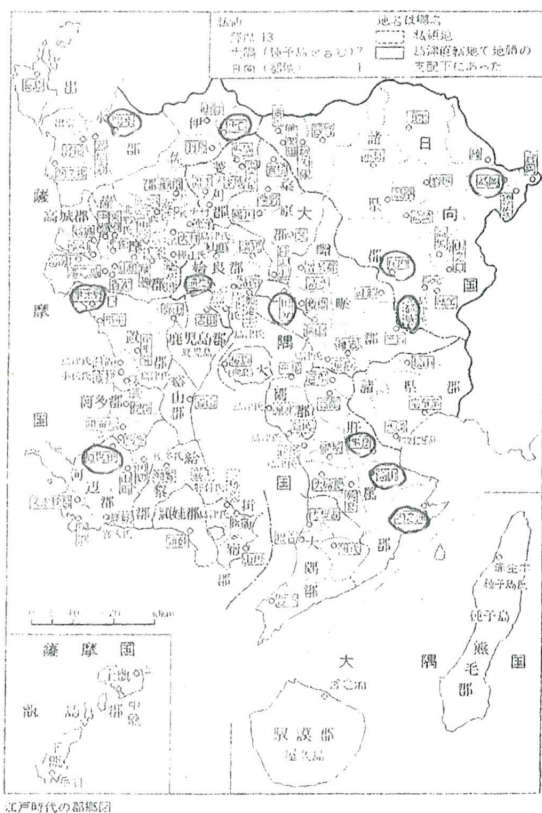
敷、外ニ茶吞所四帖半、茶のみ所八帖、又ハキタイ鍛場所ハ九枚

敷出来す。拙者居宅ハ八帖四間、六帖二間一流レニ、物置六帖

下人部屋式帖を被相渡……

④《武器調査》（安政三年（五年））

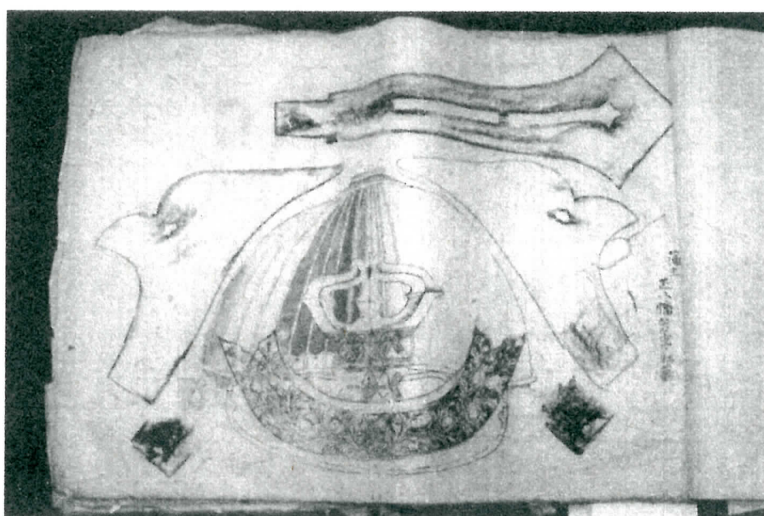
○御領國中巡回の節ハ、神社佛閣寶藏の神器書画、其外諸武器也 其節ハ画師柏木藤七氏なり。諸郷二而取持二逢、加世田等二而ハ鯨かとれ、是を肴ニして終夜吞々と相始候処、終に藤七との央より歸りて病死いたされたり。絵もよく書け、人物もおもしろき仁故、先樂ミ相考候処、遺憾之至也。其跡二馬龍眠といふ、馬場伊齋殿、平の青木氏より養子ニなる。すへて寫終ると水戸の集古拾種の如、上木ニ相成る筈なるを、御誓去相成、遺憾千万也。上木相成候上ハ、天下の名物と可成に、千裁の遺憾也。予か名も残るへきに。



江戸時代の藩界図

⑤《藩版製作》（元治（慶應））

○村田源右衛門殿ハ予か親友也蘭田居住其後新屋敷へ移宅せしか此予二勤王の志を進られ保健大記并打聞を見せられ勤王の事を色々被相嘶其後江戸詰被仰付候故栗原先生え入門いたし色々國論を相うこかし候処、令講義の事をはなされ候故、是非上木ニして天下に廣めたく思ひ、其入費金五百円あれハ出来する事故歸りて新納駿河殿え時の御家老也一向願候得ともはたさず、又美玉三平氏え是も栗原先生の門人也談し、加治木城主の島津内匠殿え今の「新納仲左衛門殿并舎弟邦永仲之丞又ハ宇都宮勘左衛門殿え計り、五百円の金を願出候処二、御決心相成居候処、時の御用聞江田平蔵え御沙汰ニ相成候処、是ハ將軍家え對し不相濟事柄ハ相留被成候方可然とこばまれ、終ニそれゆへ



はたさず。それより思ひかへ、中山次左衛門氏ハ予か従弟にて、

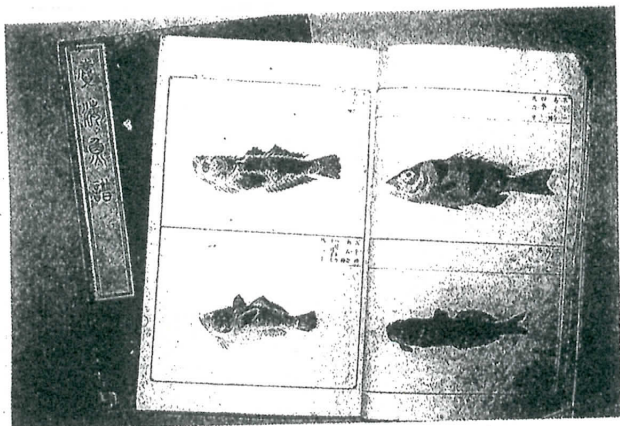
幸、久光公の御側役故、折々相嘶し上申いたし候処、終ニ御聞濟相成、先生を呼下御直二御頼之筈ニ相成、直二迎ニ差越、其時元治元年霜月廿七日出立、江戸へ同月廿日二着。明る廿一日差越候而御状相談候処、公義の方よほと六ヶ敷、當時江戸ハ御家老岩下佐次右衛門殿ゆへ、及相談候処御留守居新納嘉藤次え談し相成、周旋有之候処、霧島神社参詣と名付許可相成、二月廿一日「江戸立、家内衆世話故、二男寅次郎殿、孫巨摩之助殿、家来老人四人同道二而下着候処二而、上町桐野孫太郎所旅宿相成居候。然る二兩日すると、二ノ丸の御馬廐所二而御逢相成御直二令講義と日本紀私讀本と御依頼、八月一日當地打立霧島上り先生足よからず候故、寅次郎殿、巨摩之丞殿、三玉三平殿甥中島白圭殿、是ハ絵師也、是も□□同伴二而江戸登也、并足輕老人被仰付出立す。霧島の絶頭え上り逆鉾を真寫して持歸り是に理由を書て先生給りぬ。久光公の御下知二而上木ニなし諸所有志の者え配当す。是ニハ逆鉾の訳をしるされたり。○職原鈔私記拾二冊も上木被成拙者ニも一部拝領仰付候それハ高崎五六殿え賤別に遣す。是ハ是非一部探出し度もの也子孫さかし出し子孫ニ傳ふへし。

木脇啓四郎「啓四郎生涯の順序覚書」、

弟子丸呉橋、江口宗助、中島白圭等取調所二ノ丸御書院後ノ方へ御設ケ相成、右人数出勤いたしたり

⑥《薩隅煙草録・覽海魚譜》（明治十四・明治十六）

○伊地知喜次郎殿ハ小十郎先生の嫡子ニ而是もおとらむ父君の生涯集め置れたる古文書を編年躰ニなし其冊数拙者立て臍の上迄有何故に是を知るかといへハ農商課



課長青江秀といふ此人煙草論を書れたるが拙者へ
真圖を書與候様無被相頼候ニ付、國分出水指宿え差越取調の上、
上梓被成、一冊五位ツ、二而、日本中ハ勿論西洋各國迄も配分相
成候由二而、拙者へも骨折せしとて一冊給りたり。今猶現
存す。

○同課長白野夏雲といふ人魚類の真寫を依頼候付、
書方いたし候処、すへて是を額ニして目今興業館内ニ
かゝけられり。予かたみなり。

弟子丸弘喬書簡（中島信徴宛） 明治十三年三月二十一日付
（上略）

○木脇兄ハ元氣候哉。彼ノ淫婦人ハ去候由、是計ハ陰ニ而も天地ヲ仰俯嬉數存申候。早速、祝義狀、彼人
へ差出度存候へ共、於今遅々仕居候。拙義も堅山某杯か木脇ヲ盲目同然ト申タル事ハ奥山藤一郎ト云人ヨ
リ正 承り、残念共何共申計無之、私迄もかの婦人か舌頭ニ而、木脇士ハ疎遠致シ□候交り子御□ヨリ推
量仕居候。博見□ニ而、一往（日向辺ヨリ）【見せ消ち】（帰省）立歸候而、下町へ會所建御用仕居候節も、
祢寢某、本田九郎、江夏などヨリ私へ異見致候様、度々承候へ共、至極最愛之婦人ヲ存知ツ、朋友トハ
申物ノ、情誼格別ノ事故、黙止居候事も数度有之候處、却而疎情ニ逢ひ、実ニ不本意ニ存候處、滔々タル
天日ハ奸惡汚行人ノ難覆、終ニ離別ト承候節ハ、飛立様ニ有之候。若哉、御序も有之事候ハ、此概畧、
木脇へ御洩知被下度、奉仰願候。同人、今ハ如何候半。華道宜、且人望有之人物故、学校教師ニ而も候哉。
此中ハ、鹿兒島縣職員録ヲ見候處、郡長并書記官ノ中ニハ不相見得候而、不審ニ存候。又、今ハ老ヲ養ひ、
唐渚へ引籠候哉。旁ゆかしく存申候。蘭田與藤次殿ニハ書記官ノ中ニ而見當、安心仕候。

（中略）

十三年三月廿一日 於廳内宿直ニテ認ノ

弟子丸弘喬

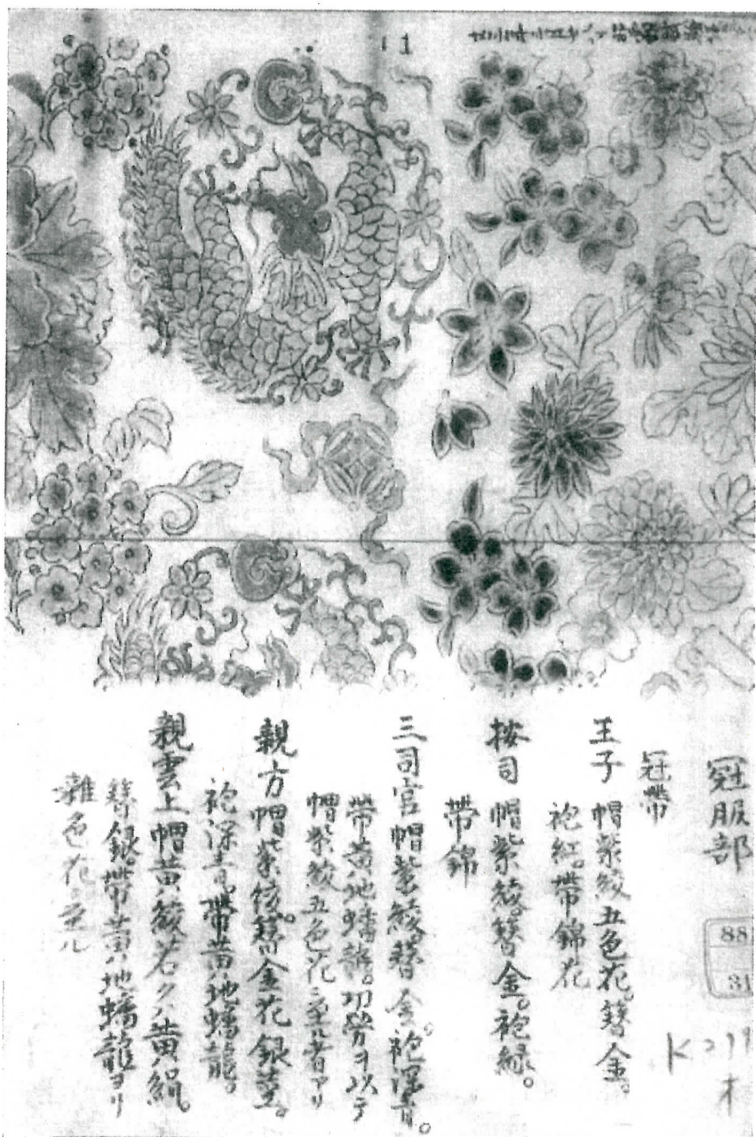
百拝

中島信徴様

参人人御中

⑦沖繩農事試験場勤務（明治十九年〜明治二十四年）

勸業課長石澤兵吾の依頼により、『琉球漆器考』の挿絵、および『花草類真写真』を描く。
田代安定の先島諸島の調査に同行。



沖繩人物図
（鹿児島県立図書館蔵）

和暦年(西暦)	年令	事項
文化十四年(一八二七)	一歳	四月十三日、沖永良部島飯屋にて木脇仁平次祐長の長男として出生。母は米松。
文化十五年・文政元年 (一八一八)	二歳	二月五日、父仁平次死去。
文政七年(一八二四)	八歳	六月末、仲仁なる人物に伴われ沖永良部を発ち、一旦琉球の運天に渡り、又沖永良部に戻り、大島、秋目、山川を経由、その後喜入まで徒歩、それより丸木船で郡元の浜に着く『萬留』。
文政十三年・天保元年 (一八三〇)	一四歳	四月末、東郷助作の世話で表御茶道となる『萬留』。定扶持、四石『覺書』。暮れには大目付座話『萬留』。□の年、木脇祐治誕生。
天保九年(一八三八)	二二歳	花道免許皆伝す『萬留』
天保十一年(一八四〇)	二四歳	木脇かねと結婚。
天保十四年(一八四三)	二六歳	初めて京都・江戸に行く。(弘化三年まで6年間江戸詰)
嘉永四年(一八五二)	三五歳	江戸詰(嘉永六年)。
嘉永五年(一八五二)	三六歳	四月十三日江戸を発し、武具調査のため北関東、東北、越後方面を旅行。同行は、小原四郎兵衛、吹田秀太郎、日高存龍院、山城屋久兵衛。六月七日江戸着。島津折烏帽子を藩主斉彬に献呈、採用される。閏七月に家老から達がある『斉彬公史料 二』四七一)。
嘉永七年・安政元年 (一八五四)	三八歳	武器調査のため領国内を巡回する(安政五年まで)。
安政三年(一八五六)	四〇歳	
文久三年(一八六三)	四七歳	七月二日、薩英戦争の兵火のため家を焼かれ、多くの家財を失う。□十月十二日、美玉三平が沢宜嘉、平野国臣らと生野で拳兵(生野の変)。
文久四年・元治元年 (一八六四)	四八歳	十一月二十七日、鹿児島を発す。
慶應二年(一八六六)	五〇歳	正月、京都にて島津久光より栗原信充を江戸から呼び下すよう命じられる(中島三三『御暇願』)
慶應四年・明治元年 (一八六八)	五二歳	正月二十日、江戸着『断片』。二月二十一日、江戸を発足。三月九日伏見着。同九日大阪着。(栗原信充『日本外史正誤』五月五日、栗原信充・同寅次郎・同駒之丞らと鹿児島着『覺書』・『御暇願』)
明治四年(一八七二)	五五歳	十一月十五日、令講義御取調掛として、隔日二の丸詰めを仰せ渡される(勤方書留)。
明治五年(一八七二)	五六歳	この年、『軍防令講義』(薩摩府学蔵板、八巻八冊)・『官位令講義』(同上、五巻五冊)刊か。
		『職原鈔私記』(薩摩府学蔵板、十一巻十一冊)刊。
		十一月十三日、樋脇・山崎・大村・鶴田・佐志・黒木・宮之城・入来・蘭牟田の受持掛となる(勤方書留)。
		六月十五日、博覧会御用のため鹿児島出立、七月一日東京着。七月一日から八月二十三日まで産物取調。同二十四日から事務局出仕。
		「入来 樋脇 永利 隈之城/平佐 高江 伊集院 郡山 市来 串木野 嶋」副郡長。
		八月十五日、十三等出仕博覧会取調掛(明治五年壬申九月戸籍人員取調帳)

和暦年(西暦)	年令	事項
明治六年(一八七三)	五七歳	苗代川陶器会社に勤務。
明治七年(一八七四)	五八歳	長男弥太郎死去。
明治八年(一八七五)	五九歳	上海へ陶器販売に赴く。
明治十年(一八七七)	六一歳	小林の副区長(明治十年四月奥里 管轄郷萬留(木脇家蔵) □西南戦争勃発。三月、藤次郎、西郷軍に加わり肥後に出陣『覺書』。
明治十四年(一八八二)	六五歳	□二月、『薩隅煙艸録』刊。
明治十五年(一八八二)	六六歳	□三月 翌年に開催される「水産博覧会」規則が太政大臣・農商務大臣の名で発せられる。
明治十六年(一八八三)	六七歳	これを受けて県令渡辺千秋は白野夏雲に命じ、近海魚類に関して産額表・捕獲方・規程・松魚經由路・図絵の調査を行わせた。これ以後、啓四郎は市場に足を運び魚類の写生。
明治十七年(一八八四)	六八歳	□三月十六日『寛海魚譜』(白野夏雲編・鹿児島県勸業課)刊。
明治十八年(一八八五)	六九歳	『寛海魚譜』(肉筆彩色本)は第一回水産博覧会(於東京上野)において他の勸業課の出品と合わせ褒章を受ける。
明治十九年(一八八六)	七〇歳	四月十五日、菱刈・始良・桑原・曾於郡御用掛(月給八円)。(御受書)
明治二十年(一八八七)	七一歳	加治木郡役場御用掛(明治十八年四月廿日ヨリ/木脇啓四郎殿御病症二付明細簿)。
明治二十二年(一八八九)	七三歳	このころ、沖縄県泉崎村農事試験場勤務。
明治二十四年(一八九一)	七五歳	新納中三の依頼により、十九年六月から明治二十二年六月にかけて『南島雑話』の写本を作成する(鹿児島大学附属図書館蔵『南島雑話』)。
明治二十五年(一八九二)	七六歳	『琉球漆器考』刊。
明治二十六年(一八九三)	七七歳	十一月頃、花岡島津家の「朝鮮御在陣中大小戦之図屏風」(一双)を写すことを思い立ち、磯邸に伺ったところ、筆写を命じられる。一通り完成するも、右の目を痛めたため、後を中島白圭に任せる。
明治三十年(一八九七)	八一歳	この頃、鉱泉発見。
明治三十一年(一八九八)	八二歳	七月初め、磯山に紅葉・桜を移植することを思い立つ(啓四郎歌稿)。
明治三十二年(一八九九)	八三歳	○「明治廿六年也」
		文月のはじめ磯山に紅葉桜を移植せんとし思ひ立しハ/北白河の親王磯邸へ入ラセラシ時ナリケリ/
		思ひ立つ心ハまたさうすもみち八しほになして人にミせはや
		いとふへき恥もふかくも忘られて花に心をつくすころ哉
		年毎に紅葉桜を植継て吉野龍田の山にまかさん
		六月二十五日、『啓四郎生涯の順序覚書』執筆。
		十月十七日、『大石兵六物語』を写し終わる。毛利正直自筆『大石兵六物語』を中島三三(白圭)が写しておいたものを借り出し再転写。
		十月、「義弘公御履歴之碑」建立を計画し、碑文を撰す。
		この年、『萬留』執筆。
		二月二十三日没。南林寺墓地の先祖累代の墓地に葬る(後、市宮郡元墓地に改葬)。

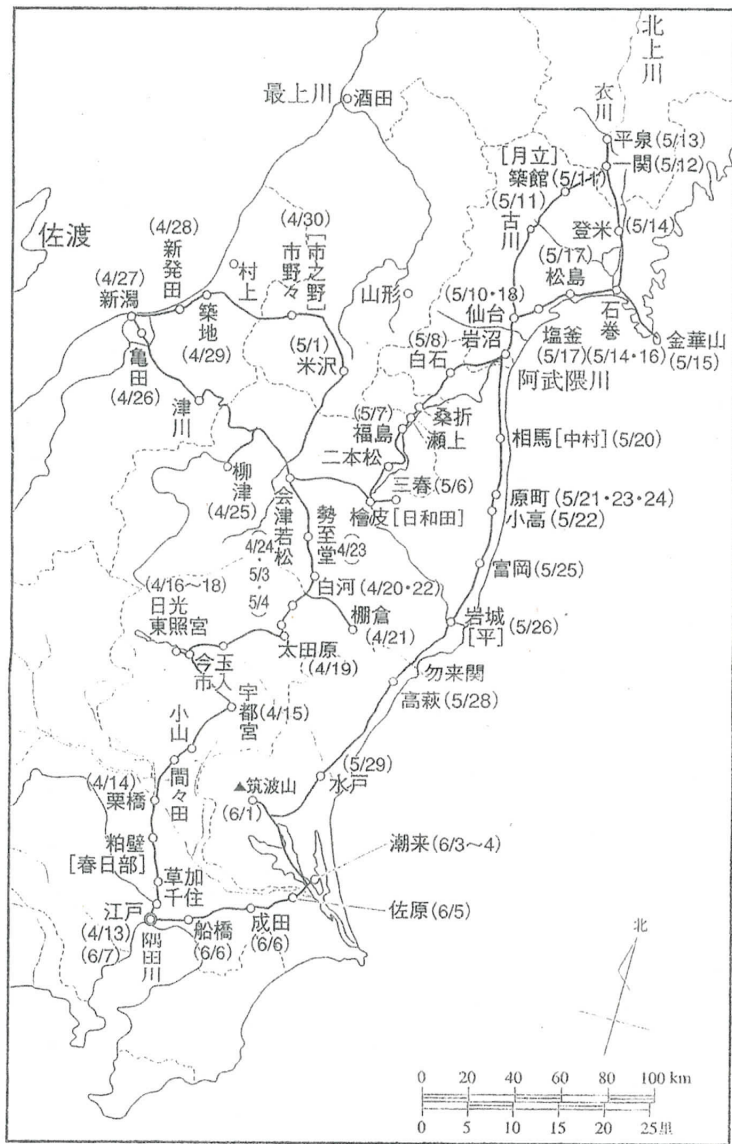
世の主の墓（県指定文化財）
前庭と中庭を設け、周囲を野面積みの石垣で囲んでいる。墓室は崖を掘り込み、中央に世の主と妻子の骨壺があり、四方に四天王とされる骨壺が安置されている。琉球式の大きな掘り込み墓で、琉球式墓の変遷を知る上で貴重な史跡である。



世の主城跡
現在は世之主神社が建立されている。周辺の遺跡からは当時の権勢を偲ばせる遺物が出土している。



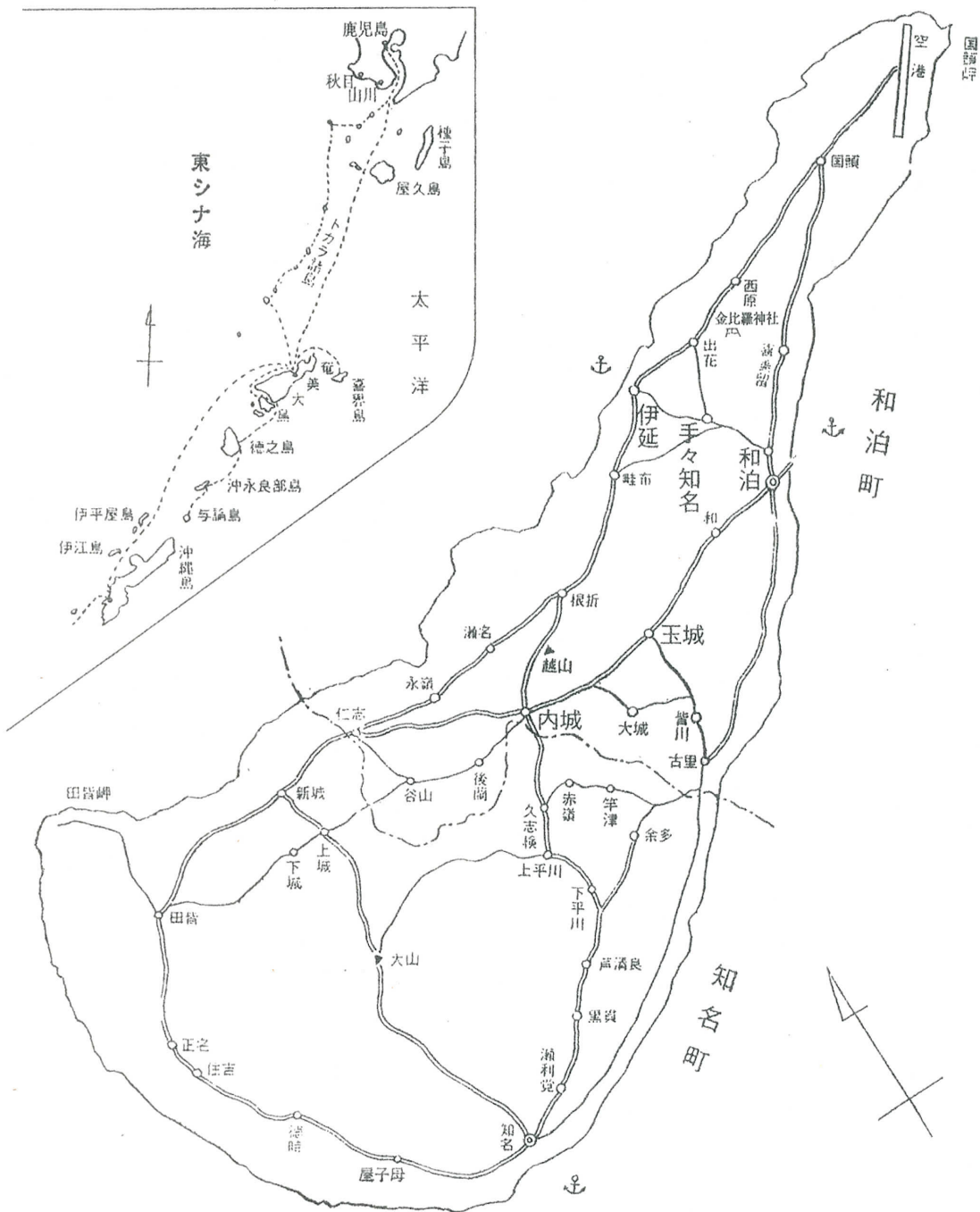
沖永良部島 100 の素顔
(東京農大出版会、2008年)



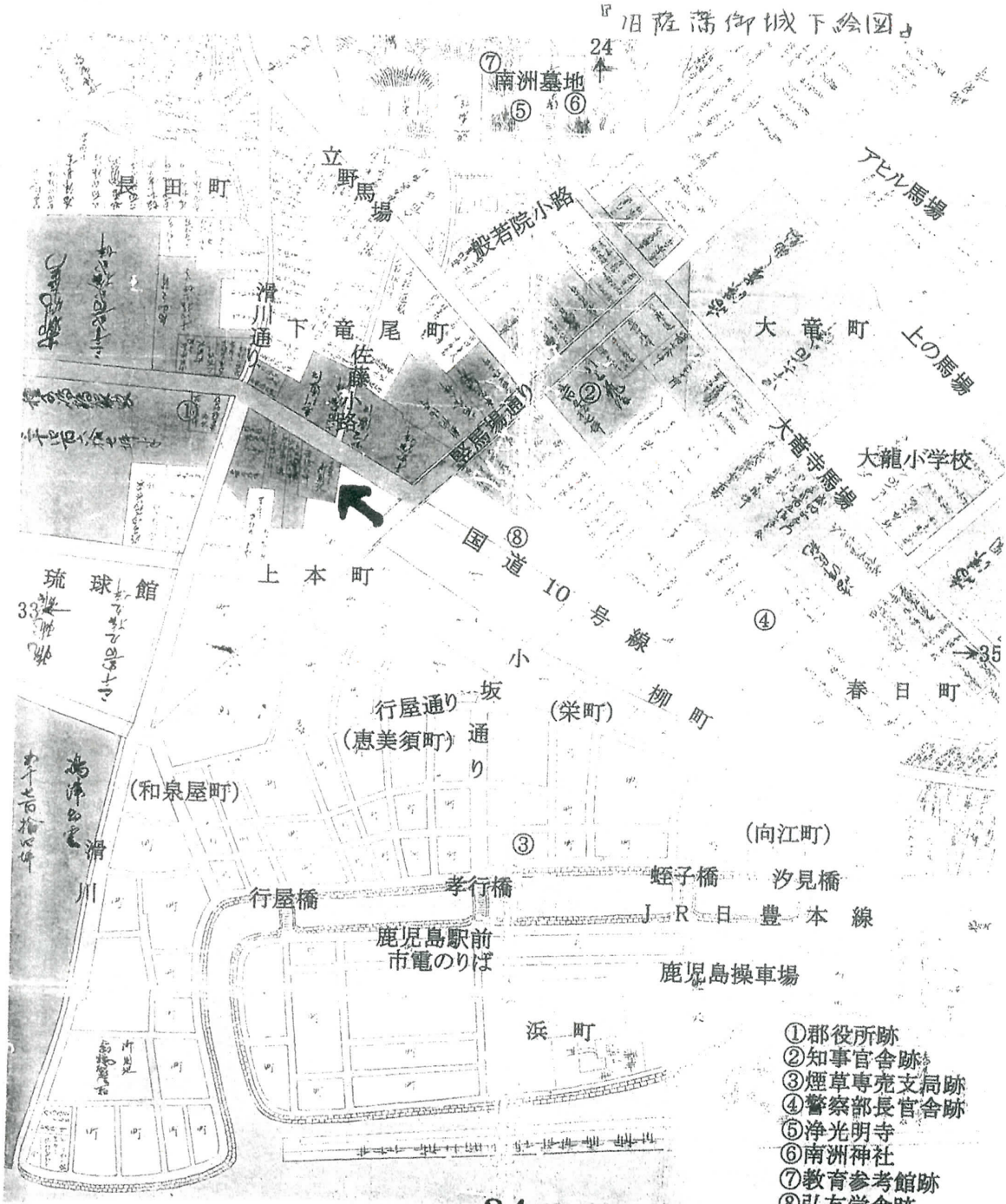
巡回旅行の行程図 *括弧内の数字は一行が宿泊(通過)した日を示す。

(拙稿「翻刻 本島啓四郎『国日記』」
— 嘉永五年の関東・東北・越後の旅日記 —
『国語同文 薩摩路 50号』 2006年3月)

薩南諸島の島々



沖永良部島図



- ① 郡役所跡
- ② 知事官舎跡
- ③ 煙草専売支局跡
- ④ 警察部長官舎跡
- ⑤ 浄光明寺
- ⑥ 南洲神社
- ⑦ 教育参考館跡
- ⑧ 弘友学舎跡

鹿兒島市街地踏査圖

凡例	
	川
	橋
	道
	市街
	山
	市界
	電停
	交番
	田
	神社
	冷泉
	墳墓
	鐵道



明治三十年十一月
同治十一年七月
明治十一年七月
同治十一年六月

製後許不

発行
印刷
著作